

新羅における短板叩き平瓦の出現と意味

－弧状叩きと横方向叩きの区分と特徴－

車 順 喆

- I. はじめに
- II. 新羅瓦の研究の関心とその変化
- III. 新羅短板叩き瓦の特徴
- IV. 短板叩き瓦の生産と供給および管理
- V. おわりに

要 旨 新羅瓦研究において最も重要な遺物と認定されている「儀鳳四年皆土」銘短板叩き瓦は、679年という絶対年代をもつ。この瓦の存在は、我々の前に新羅の発展した姿を浮かび上がらせるが、8世紀に入って当時の東アジア全体を揺さぶる政治的激変と混乱を收拾した唐・新羅・日本の東洋三国が政治・経済・文化全般において全盛期を謳歌するようになるという点で、この瓦をひとつの文化的象徴と見ることができる。統一を達成した新羅はそれ以前とは格段に異なる文化発展を達成し、最も華麗な瓦文化をもつようになった。このため、瓦製作の発展の様相によって当代文化の変化と瓦葺き建物の増加を分析し、都市機能と坊里内での変化を調べることができる。そこで本論では、既存の新羅王京地域での発掘調査で出土した平瓦と磚のうち、比較的初期の瓦が出土したものと認定されている遺跡を中心に、出土事例と叩き技法そして造瓦技法に対する比較作業を行い、個々の遺物が出現した時期について考察した。また、慶州および地方で出土した平瓦と磚のうち、比較的初期の瓦が出土した遺跡を中心に短板叩き瓦を比較し、慶州と地方の間での瓦の製作時期と特徴の違いを検討した。その結果、慶州地域において短板叩き瓦が製作された時期は679年以前と判断され、少なくとも679年からは短板叩き瓦とともに中板叩き瓦が生産されたことを確認した。また、慶州蘿井遺跡から出土した「儀鳳四年皆土」銘文瓦と蔚山立岩里遺跡から出土した「井拵」銘銘文瓦は、中板叩きと短板叩きが共に使用された瓦で、679年頃には短板と中板の二種類の叩き板が共存していたと判断した。瓦の製作技法を見ると、無瓦桶あるいは桶を使用する短板叩き瓦が初期に製作された後、次第に無瓦桶式の瓦が消滅し、円筒桶を使用する中板叩き瓦に変化してゆく。このような瓦の製作法の変化は、瓦桶を利用した造瓦技法の効率性に起因するものと判断される。ただし短板叩き瓦は、中板叩き板で製作された瓦に比べ作業能率の面では劣るが、作りは非常に丁寧である。このような作業工程のあり方は、単純に作業効率だけで説明するのが難しい部分であり、これらの短板叩き瓦の製作は宮城または官庁などに納められる瓦に限定されていた可能性をうかがわせる。よって、短板叩き瓦は一定の目的をもって製作された可能性が提起される。

キーワード 慶州 叩き板 短板 中板 長板 印章

I. はじめに

新羅瓦研究において最も重要な遺物と認定されている「儀鳳四年皆土」¹銘短板叩き瓦（第1図）は、679年という絶対年代をもつ。この瓦の存在は、我々の前に新羅の発展した姿を浮かび上がらせるが、8世紀に入って当時の東アジア全体を揺さぶる政治的激変と混乱を收拾した唐・新羅・日本の東洋三国が政治・経済・文化全般において全盛期を謳歌するようになるという点で、この瓦を一つの文化象徴と見ることができる。一種類の瓦が出現したという事実をもって新たな文化が創出されたとするのは飛躍かもしれないが、少なくとも新羅においてこの時期は前代と比べて社会や文化における大きな変化があった。

新羅が、朝鮮半島内の統一を成し遂げ、高句麗と百済の文化を受容し、新たな文化を発展させることができた原動力は、まさに「一統三韓」の語で示された三国統一の達成であったが、前時期から大きな変化を見せることになった契機と、その産物として登場した様々な措置、そして生活と文化受容に伴う変化などを通じて導出された政治、社会経済および文化の発展は、結局新羅が全盛期を謳歌することのできる基礎となった²。

古代国家において国王の威厳と治績を広報する手段としては、文章を記して建てる種々の石碑があげられる。こうした金石文資料は、当時の社会で読み書きのできる少数の知識人の間のみで共有される記念物であった。一般の人民、すなわち王京内の居住者たちにとっての功德碑は、意味を伝達する手段というよりも視覚的効果を与える象徴物であったと言える。しかし巨大な宮城・城壁・寺院・瞻星台などの建築物は、見るだけで容易に人々にその意味と象徴するものを伝え、強い印象を与えることができる。また、外国からの使者に新羅の発展と威厳を示す第一の関門として、これらの建築物が重要な意味もっていたと言える。それならば、このような記念物としての政治性を帯びた大型建物を建立した目的は、「当時の社会の中で行われた歴史・文化・技術の結合」と言うことができ、「権威建築物」³を建立するために当時の全ての文化的力量を投入したことが知られる。新羅における代表的な権威建築物としては当時の宮城である月城と臨海殿、宗教施設である皇龍寺、公共施設である月精橋、日精橋といった橋などがあげられるが、一般の人たちが見て感じ、体験できる空間は主に宗教施設や交通施設などに限られていた。しかし、王権の象徴を目にすることで、統治の威厳と都市の発展を感じたことであろう。

三国の中でも辺境に位置していた新羅であったが、統一達成後に新羅で生産された瓦に現れた多様な文様は、東アジアの巨大帝国として浮上してきた唐と新羅が、文化の受容において大差なく、互いに同じ文化を享受していたことを物語る⁴。結局、統一新羅時代に製作された各種の軒瓦を装飾した華麗な文様は、新羅と唐の間で行われた活発な交流の産物であると言える。8世紀以後、新羅は統一王朝の威相を表出するために唐の文化を受容し

た。これに伴った官僚体制の整備と行政機構の変化などを根拠にこの時期からを中世とする見解もあるが、強固な骨品制度が維持されていたことは、いまだに新羅が古代国家として存在していたことを示している。このような問題点は高麗の建国まで新羅の発展における障害物として残っていたものの、統一を果たした新羅は以前の時期とは大きく異なる文化発展を達成した。そしてこの発展の中で東洋三国のうちで最も華麗な瓦文化を保有するようになった点は、非常に特徴的な姿である。多様な形の瓦が大量に生産され、様々な需要に対する供給がなされ、新羅王京内の宮城・寺院・一般家屋では特色ある瓦が使用されていた。そしてこのような瓦の需要拡大は、造瓦技術の発展をもたらした。新羅王京にみられる多様な瓦を通じ、我々は新羅王京の規模と坊里内での変化を明らかにすることができる。

よって本論では、既存の新羅王京地域での発掘調査で出土した平瓦と塼のうち、比較的初期の瓦が出土したと認定されている遺跡を中心に、出土事例と叩き板の特徴の変化⁵、そして造瓦技法⁶に対する比較作業によって個々の遺物の出現時期について慎重に接近を試みた。またこれによって、新羅王京内で用いられた初期瓦の性格と造瓦技術の変化のありかたを検討した。

II. 新羅瓦研究の関心とその変化

『三国史記』に収録された様々な記録を調べると、新羅で瓦が使用された様子が書かれている。まず祇摩尼師今11年（122）に「夏4月に大風が東から吹き、木が折れて瓦が飛んだが、夜になって止んだ。」という記録⁷、また助賁尼師今4年（233）には“夏4月に大風が吹き屋根の瓦が飛んだ。”という記録⁸が見られる。この記事の内容についての信頼性はさておき、注目される内容は風で瓦が飛んだという部分である。慶州地域から出土した瓦のうちきわめて薄い瓦がこれに該当するのかは検討を要するが、瓦の薄さは初期瓦の特徴のうちの一つと認定されており、この部分について再考する必要がある。

金誠龜は、新羅瓦の発生について『三国史記』に現れた上記記事の内容に注目し、西暦2～3世紀頃には宮城で瓦が使用されていたものと推定している。しかし実物資料が伝わっていないため、慶州半月城、明活山城、仁旺洞古墳などで出土した軒丸・軒平瓦の年代を5世紀頃と推定し、仏教伝来以前にすでに瓦が使用されていたと見ている⁹。しかし、未だに新羅王京内で確認された古式瓦はおおむね5世紀を上限年代としており、追加調査を期待せねばならないようである。

申昌秀は、皇龍寺跡の瓦廃棄土坑で出土した瓦の分析により出土遺物を4期に区分し、時期ごとの瓦の特徴を考察した¹⁰。この区分案によると、第1期（553～569年）＝皇龍寺創建期、第2期（6世紀後半～末）＝改築期、第3期（7世紀初～中頃）＝九重木塔の完

成、第4期（7世紀末～8世紀中葉）＝瓦廃棄土坑の下限、と分期されている。特にこの論文では、初期に百済から新羅に伝来した瓦製作技術がそれ以後、高句麗の影響を受けながら変化し、次第に新羅固有型式が形成されたものと推定している点が注目される。また慶州地域の初期瓦については、月城出土資料を根拠に6世紀前半から製作された軒瓦が宮城などで使用されたものと見ている。

この論文のなかで、新羅瓦の成立問題において重要な位置を占めている高句麗系蓮華文軒丸瓦について、最近批判的な意見が提出されており、筆者も再考の余地があるものと考ええる。特にその起源に関する問題は、新羅瓦の生産と関連して重要である。

朴洪國は、慶州望星里瓦窯跡から「儀鳳四年皆土」銘のある平瓦と軒平・軒丸瓦についての考察を通じ、当時の瓦の生産および受給関係などについて論証した¹¹。そして慶州望星里新羅瓦窯跡で生産された「儀鳳四年皆土」銘文瓦とともに製作された軒平・軒丸瓦そして宝相華文磚が、望星里から月城や雁鴨池など複数の遺跡に供給されていたことを明らかにした。その結果、新羅瓦研究において古式と新式瓦の使用時期を区別しうる画期が確定した。

しかし、儀鳳4年に生産された蓮華文軒丸瓦でa～eの5型式、唐草文軒平瓦はA～Gの7型式が確認されている¹²ものの、この型式差の意味するところは様々である。同一文様の瓦の複数箇所での大量生産や、瓦範の改造または変形を通じた同範瓦系列の生産が考えられる。また、文様が同一でも遺跡によって瓦の用途が異なること、すなわち創建瓦と改修瓦、修理瓦といった違いとも考えられる。このように多様な型式が確認される様相は、築造のために大量の瓦が必要であったため、初期から複数の瓦窯で生産された瓦が供給された可能性が高いことを示す¹³。結論的には、このような差からみると、新羅では、その初期から複数の窯が消費地へと瓦を供給していた可能性が高いと判断される。

崔兌先は、瓦桶および瓦の凸面に打捺された文様についての型式分類を行い、三国～朝鮮時代の平瓦編年案を提示した。これによると漢江以南地域で6～7世紀に短板と中板がともに使用されたが、瓦製作が始まった時期から同時に使用されたのか確認できないものの、7世紀初頭から8世紀初頭までは継続して使用され、その後8世紀中葉～9世紀に長板叩き板が出現して、これに変化したものとみた¹⁴。そして新羅瓦の使用された時期のうち6世紀以前の段階については明確には区分していないが、円筒形瓦桶に短板叩き板を横方向に叩いた瓦（ⅡAb型式）については6～7世紀頃に使用されたものと見ており、百済地域とは区別されるとした¹⁵。しかし慶州仁旺洞556番地遺跡で模骨桶と土器製作技法で作られた瓦が確認された点を考慮するならば、「新羅地域では平瓦製作の開始時期から円筒瓦桶を使用していた。」と見る意見は修正される必要があり、結局三国時代の瓦製作技術は互いに類似した姿で発展したと言える。

また、統一新羅時代に慶州の新羅王京内で長板叩き瓦が製作・使用されたか否かという問題は、新羅瓦研究における重要な問題の一つである。最近、慶州市内での小規模発掘調査が増加する中で、長板叩き瓦の使用時期についての新たな資料が出土しており、これらの遺物に対する比較検討を通じて長板叩き瓦の製作と使用の問題について、さまざまな意見が発表されている。

趙成允は、慶州地域の雁鴨池から出土した平瓦の叩き文様の分析を中心とする一連の研究で、短板叩き平瓦の上限年代を7世紀末、下限年代を9～10世紀頃と推定した¹⁶。また、雁鴨池出土瓦の分類により、古新羅時代の遺構と苑池が築造される674年、建物が完成する679年に区分し、古式蓮華文軒丸瓦と区分される雁鴨池の創建瓦を設定した¹⁷。そして、統一期まで慶州地域では長板叩き瓦が製作されなかった可能性を提起している¹⁸。

これに対し筆者は、東国大学校埋蔵文化財研究所が発掘した慶州三朗寺3キル遺跡の統一新羅時代の瓦廃棄土坑から出土した、中板叩き瓦に共伴した長板叩き平瓦¹⁹を慶州地域の長板叩き瓦のうち最も古い遺物と推定した²⁰（第2図）。この平瓦は凸面の文様が長板の太線魚骨文で、高麗時代の瓦に現れる魚骨文の祖型であり、共伴した遺物から見て遅くとも9世紀頃には廃棄されたものと推定される。従って、この瓦により慶州地域で長板叩き瓦の製作と使用が行われたことが知られ、長板叩き瓦の出現時期を推定するのに重要な基準となる。

金基民は、慶州蓀谷洞・勿川里瓦窯跡の出土瓦を検討し、合計5段階に区分した。それによると、1段階に慶州地域で初期に製作された瓦は平瓦と丸瓦が区別されない形態で、無瓦桶式により製作され、6世紀前半以前に該当する。2段階は6世紀前半と中頃の間で、百済から軒丸瓦の製作法が導入されるが、無瓦桶式で作った丸瓦に瓦当を付ける一体型²¹の製作技法である。3段階は模骨桶が導入される時期で、百済の瓦工人により製作された瓦と在地の固定式瓦桶を利用した製作技法が確認され、6世紀中葉と推定される。4段階は7世紀を前後する時期で、円筒形瓦桶と丸瓦桶が登場し、丸瓦は3枚作りで、平瓦には側面への2次調整が行われる。5段階は新羅瓦が定着する時期で、7世紀中頃から8世紀中葉以前に該当する。円筒形瓦桶による平瓦の製作と2枚作りによる丸瓦の製作が行われる²²。

第1表 瓦桶ごとの造瓦技法の特徴（金基民 2001）

特徴 瓦桶	素地形態	胎土	焼成	調整	分割枚数	瓦刀痕	布目有無	瓦当接合法
無瓦桶	粘土紐	精	軟質 硬質	同時期の 土器と同一	平: 4枚 丸: 4枚	全面二次 調整	無	一体成形
模骨瓦桶	粘土紐 粘土板	精粗	軟質、硬質、 瓦質	叩き板に よる叩き	平: 4枚 丸: 2枚	全部 一部	有	分割成形 接合
円筒瓦桶	粘土板	粗	瓦質	叩き板に よる叩き	平: 4枚 丸: 2枚	一部	有	分割成形 接合

沈相六は、慶州仁旺洞556番地遺跡で出土した印章瓦について、報告者の意見に同調しつつ百済の瓦工によって製作されたものと見ている²³。この場合、百済の瓦製作技術の新羅への伝播過程を推定することができるが、初期に製作された蓮華文軒丸瓦の大多数が百済系のいわゆる「大通寺様式」である点は、瓦の技術だけでなく瓦範の伝来²⁴を想定可能にする。印章瓦が主に使用された百済では、公州公山城・扶余扶蘇山城などで確認されるのに対し、慶州地域は多少遅れる様相を見せる。また、百済の印章瓦には五部、干支などの文字が確認されるのに対し、新羅では符号や記号が表示されている（第3図）。このような差が現れた原因は、印章瓦を製作していた工人集団の性格の違いと推測される。すなわち慶州地域で印章瓦を製作していた工人は百済から造瓦技術をもたらした工人と考えられ、百済が滅亡した後に慶州に移住した工人たちが印章瓦を製作した可能性が高い。この推定の根拠は、印章瓦および印章磚に表記されたのが、文字ではなく記号である点である。従って、新羅で印章瓦が製作された時期は679年以後と判断される。そして印象の形をみると、既存の百済地域で使用していた方式が新羅化しているのを見て取ることができ、その原因はつまるところ、製作環境の変化であると考えられる。

李仁淑は、年号のある銘文瓦を基準に、国内の遺跡から出土した統一新羅から朝鮮時代までの平瓦を属性分析した。これによると、短板叩き板は三国時代から679年前後まで使用され、中板叩き板へと変化した。短板と中板がともに使用された短い過渡期を経たものと把握し、短板叩き板の使用時期は679年前後とみている。そして中板叩き板の使用時期は679年前後から847年以前で、その上限は短板の下限年代と同一であるとし、将島清海鎮遺跡²⁵と永同稽山里遺跡²⁶で確認された中板および長板叩き瓦の共伴関係を根拠に下限年代をとらえている。将島清海鎮遺跡の存続期間が828年から851年であるため、その下限は851年と見ることもできるが、扶余扶蘇山城で出土した「會昌七年（847）」銘以後に製作された銘文瓦のほとんどが長板叩きであるため、847年を下限年代と見ている。そして長板叩き板の出現が、将島清海鎮遺跡が形成された年代である828年まで遡る可能性を考慮しつつも、中板と長板叩き瓦がともに使用される過渡期を設定しうるため、いったん847年以後から使用されたものと推定している²⁷。

筆者は、国立慶州文化財研究所が発掘調査した仁旺洞556番地遺跡の報告書で、建物跡の下層であるⅦ層で確認された根石とともに出土した高坏の年代を考慮し、遅くとも5世紀後半に築造された建物が存在する可能性を提示した。また、共伴して出土した無瓦桶式の平瓦と印章瓦の年代を5世紀末～6世紀初頭と推定した²⁸。そして南北道路路面から出土した「儀鳳四年皆土」銘銘文瓦は道路が補修された下限年代を示し、模骨桶で製作された平瓦が建物基壇層で確認されたことから、新羅において瓦が製作され使用された時期は少なくとも5世紀末以前と判断され、この時期から瓦が幅広く使用されていた可能性がある

見た²⁹。

以上のような様々な研究者たちの成果を見ると、慶州地域で瓦が最初に使用された時期は5世紀後半である可能性が高いが、この時期に該当する建物遺跡や瓦に対する確認が必要である。新羅王京の調査の進展によって、このような問題が解決されるものと期待される。慶州地域では、5世紀末あるいは6世紀初頭から寺院などに瓦が葺かれるようになったことが明らかになりつつあり³⁰、また瓦を製作した瓦窯も複数個所で発掘調査が行われたことによって受給関係についての接近が可能になった³¹。そして、長板叩き瓦の使用問題については、現在までの限られた資料からは、より慎重な検討と接近が必要である。

山崎信二は、日本および朝鮮三国時代の重要遺跡から出土した瓦についての比較検討を通じ、個別の瓦の系統を区分した³²。その結果、法隆寺式瓦は百済と関係し、湖東式瓦は高句麗系の亡命者たちと関連するものと推定した。そして紀伊上野廃寺、伯耆斎尾廃寺で出土した忍冬文軒平瓦に現れた包み込み式製作技法³³を新羅系統と見ると同時に、檜原廃寺式軒丸瓦に見られる蓮弁文様の類似性、瓦当裏面の叩き目、粘土素地の糸切り痕跡、軒平瓦顎部の文様などから新羅瓦との関連性を探っている。さらに、仁旺洞556番地遺跡から出土した瓦との比較により、新羅瓦と密接な関係があったことを指摘している。

また山崎は、中国と朝鮮三国の平瓦製作技法についての検討を通じ、瓦桶を使用する以前の段階の平瓦－土器製作技法（A型）、円筒桶で粘土紐桶巻作り（B型）、円筒桶で粘土板桶巻作り（C型）、模骨桶で粘土紐桶巻作り（D型）、模骨桶で粘土板桶巻作り（E型）の合計5種類に分類し、中国・韓国・日本の平瓦製作技法と比較した³⁴。

この比較によれば、東アジア地域で初めて出現した瓦製作法は土器製作技法と同一であったが、次第に瓦桶の使用と粘土素地の利用方法の変化とともに発展していることが分かる。ただし、新羅では円筒桶で粘土板桶巻作り（C型）が中心をなすとしているが、模骨桶で粘土紐桶巻作り（D型）も存在しており、これについての系統問題を確認する必要がある。

佐川正敏は、中国における瓦製作技術の検討を通じて、地域ごとに差異が確認されることを指摘している³⁵。特に南朝時期に製作された平瓦は粘土板接合法が大多数である点の特徴的であり、円筒形模骨桶の使用、吐首瓦とともに平瓦を軒平瓦として用いる伝統などが南朝から熊津期の百済へ伝播し、以後倭へと伝えられたものとみている。また中国の有顎式軒平瓦の製作技法にもやはり南北で相違のあることを明らかにした。

そして南朝の齊～梁代の造瓦技法においては、粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換が急速に進展し、変化した造瓦技術がそのまま熊津期の百済に伝播して徐々に転換が行われた後、泗泚期に入って6世紀末に日本へと伝播したと推定した。また、統一新羅時代には瓦桶に改良が加えられ、側板を紐でつなぐ可動式の形態から紐でつながない非可動式の形態へと変化しており、この改良された瓦桶は8世紀末に北部九州地域へ伝播し、11

第2表 東アジア地域における平瓦製作法の変化 (山崎信二 2009)

国家	時期	地域	平瓦製作法					備考
			A	B	C	D	E	
中国	戦国・秦		○					
	前漢初頭	黄河中流域		○				A→B型に変化
	前漢・後漢				○			非開閉式瓦桶 → 円筒形瓦桶 C型は後漢代には確実に出現 420年頃南朝の宋とつながる
	五胡十六国 (4世紀代)	華北地方				○		様々な瓦の出現、4世紀代に模骨瓦桶が出現
		洛陽			○			
	北朝				○			高句麗のD型と兄弟関係
	南朝	東晋 (~420) 宋 (420~479) 南齐 (479~502)			○			南朝の瓦は五胡十六国時代に発生した大量の流民(漢族)が華北から江南へ移動したことと関連する
		梁 (502~557) 陳 (557~590)				○	○	梁、陳の平瓦製作法はE型と考えられる 梁から百済へD・E型が伝播
	隋	南京(揚州)		○		○	○	6世紀頃から平瓦製作法が変化 隋の平瓦製作法 唐長安城 B型、洛陽城 D型、揚州 E型
	唐	長安城 洛陽城		○		○	○	唐の平瓦製作法 唐長安城 B型、洛陽城 D型、揚州 E型
韓国	高句麗				○			北朝のD型と兄弟関係 南朝の東晋と交流
	百済	ソウル(漢城) (371~475)	○			○		石村洞 4号墳、夢村土城で多数確認 5世紀前半頃に風納土城でC型が一部確認
		公州(熊津) (475~538)		○	○		○	5世紀後半頃に風納土城の瓦は百済泗泚期の平瓦(E型)、新羅の平瓦(C型)の祖型がともに存在する点が注目される
		扶餘(泗泚) (538~663)					○	大田月坪洞にはD型とE型が存在 E型が主流、D型は少量存在
	新羅	慶州			○		○	亭岩里瓦窯跡と弥勒寺跡、王宮里遺跡にはE型のみが存在
日本	奈良					○	588年に百済から瓦博士が渡来、以後E型が伝播 720年以後から一枚づくり技法が出現	

世紀末頃まで使用されたと見た。しかし日本では平城宮の造瓦組織で「平瓦一枚作り技法」が開発され、以後粘土板巻き作りは急速に消滅する。

佐川が指摘したように「平瓦一枚作り」は日本独自の製作技法であるが、一部の地域では丸瓦を粘土紐巻き作りで製作し、平瓦を一枚作りで製作する様相も確認されている。し

かし一枚作りは日本だけでなく集安の高句麗瓦でも確認されているため、製作技術の起源問題や特徴についてさらなる検討が必要である³⁶（第4図）。

日本の造瓦技術である一枚作りは、平瓦を製作する際に使用される方法であって特別な技術がなくても誰にでも容易に製作できるという点からみて、大量生産に適した技術である。しかし技術の熟練度によって、厚さや仕上げ調整には差がある。このように日本で新たな造瓦技術が現れた背景には、当時の社会相がある。奈良時代には飛鳥京、藤原京、難波京、平城京など幾度かの遷都をしながら、毎回新たな都城と宮城を造りながら既存の建物を移築した³⁷。このような遷都の過程で少しずつ瓦の需要は増大し、これを解決するためにそれまでとは異なる製作技法が模索され、必要に応じて一枚作りが急速に受け入れられたものと推定される。

以上のような先学による新羅の短板叩き瓦に関する議論によると、三国時代の新羅の造瓦技法は、高句麗・百済または中国南朝を通じて受け入れられたが、それらと同一というよりは、やや異なる点を持っていた。

1. 粘土素地接合法：粘土紐接合法→粘土板接合法
2. 瓦桶の形態変化：無瓦桶→模骨桶→円筒桶
3. 叩き板の形態と種類：短板・印章・中板→長板
4. 叩き板の特徴：短板叩き文の銘文は官印の性格をもつ
5. 瓦窯の分布：新羅王京周辺の丘陵一円

Ⅲ. 新羅短板叩き瓦の特徴

三国時代に入り高句麗、百済そして新羅の造瓦技法はそれぞれ特徴的な様相を見せる。しかし、古代から現在までの様々な変化にも関わらず、基本的な作業工程はそのまま維持されている³⁸。また、瓦製作において基本となる瓦桶使用の有無は、製作技法における重要な区分基準となっている。よって三国時代の造瓦法は「無瓦桶技法」と「桶による製作技法」に区分できるが、一般的に無瓦桶から瓦桶を使用する方式へと製作技法が変化したと考えられている。平瓦製作用の瓦桶は、幅狭で長い木片を紐でつなげて作る模骨桶と丸太を彫って作る円筒桶に区分される。また、丸瓦を作るための瓦桶は木片に孔をあけたのちに紐で巻いて作るものと、瓦の大きさに合わせて丸太を適当な大きさに切って作るものが知られている³⁹。

素地とは瓦を作るのに使用される土のことである。瓦を成形するために瓦桶に素地を巻く方法の違いにより棒状素地（輪積法、巻上法）と板状素地に分かれるが、新羅の平瓦では棒状素地と板状素地の両方が確認されている⁴⁰。

叩き板は形態によって短板・中板・長板そして印章に区分される。まず短板は縦横比が

1 : 1程度になるように作ったもので、叩きの単位は4～5回、大きさは6～8cm程度である⁴¹。瓦の表面を横方向と縦方向、あるいは無秩序な方向に叩き、瓦内部の空気を排除して、厚さと密度をそろえるのに用いる。慶州地域では、主に月城と伝臨海殿跡（雁鴨池）を中心に近隣地域でも確認される。短板叩き瓦は様々な種類が見られるが、最も知られているのは679年という製作年が刻まれた「儀鳳四年皆土」銘文瓦である。

中板は縦横の比率がおおむね1 : 3になるように作ったもので、叩きの単位は2～3回、大きさは15～20cmである。一般的に瓦の表面を横方向に叩くが、上段と下段にそれぞれ区分され、下段は縦方向、上段はやや斜めの叩きが加えられる。このような叩き方向の差は瓦製作者の作業行動と関連するものと考えられる。

長板は縦横の比率が1 : 6以上になるように作ったもので、叩きの単位は1回で、大きさは30～40cmである。

叩き板の形態が短板から中板へ、そして中板から長板へと変化する過程については、様々な研究者が考察した結果、瓦製作における時間の流れを良く反映するものと理解されている。ただし、一部の研究者は地域差と受容過程の問題を挙げている。慶州地域で出土した新羅の平瓦では主に短板と中板が確認され、長板がきわめて稀少であることが知られている。さらには、長板叩き瓦の製作が行われなかったという意見もある⁴²。

この他、最近では平瓦と磚の表面に印章を押した「印章瓦」・「印章磚」の出土事例も次第に増加している。これらの遺物についてはその起源を百済に求め、関連性を指摘する意見もある。しかし、当時使用されていた印花文土器の表面には、文字が刻まれた印章を押した事例⁴³が多く確認されている。そして瓦や磚の表面に押した印章の形態や文字の内容または符号などは、百済の印章瓦にみられるものとは異なっている。このように、瓦や磚に印章を押すという様相は百済との関連性が強いものの、異なる形に変容しており新羅化されていると言える。よって「印章瓦」・「印章磚」の系譜については、資料の増加を待つて検討する必要がある。

瓦刀は瓦を製作する際に用いるナイフで、鉄刀子、竹刀、鉄糸⁴⁴などがある。瓦桶で成形された瓦を分離したり、表面調整をしたり、素地を粘土塊から分離したりする作業に用いられる。粘土円筒を均一な形に切る作業により、平瓦は4枚、丸瓦は2枚が作られるが、初期には3枚に分割する場合も知られている。瓦刀による分離の方向については、精密な観察に基づく報告がなされている⁴⁵。特に、短板叩き瓦では粘土円筒から個々の瓦に分離した後、瓦刀で分割した断面を2～3回調整した事例が多く見られるが、これは瓦の二次調整であって大量生産にともなう作業工程の短縮化とは相容れない。よって、短板叩き瓦はその製作工程が一般の瓦とは異なっており、これは瓦の使用先が一般の建物でなかったことを示すと考えられる。

第3表 慶州地域平瓦の属性（崔孟植 2006 を一部改変）

種類		三国	統一期	代表遺跡	瓦窯跡
瓦桶	無瓦桶	○		月城核子、皇龍寺跡、仁旺洞556番地	蓀谷洞・勿川里瓦窯
	模骨瓦桶	○	○(?)	皇龍寺跡、仁旺洞556番地	蓀谷洞・勿川里瓦窯
	円筒瓦桶	○	○	月城核子、雁鴨池、皇龍寺跡、芳内里古墳群など	望星里瓦窯、東山里瓦窯、多慶瓦窯、金丈里瓦窯
叩き板	無文	○	○	月城核子、仁旺洞556番地	蓀谷洞・勿川里瓦窯
	短板	○		月城核子、伝臨海殿跡、皇龍寺跡など	望星里瓦窯
		○	○(印章)	伝臨海殿跡 国立慶州博物館美術館敷地 東川洞696-2番地遺跡	
	中板	○	○	月城核子、伝臨海殿跡、皇龍寺跡、三郎寺跡、芳内里古墳群など	東山里瓦窯、多慶瓦窯、金丈里瓦窯
	長板		○(?)	三郎寺跡	
素地	紐形	○		月城核子、仁旺洞556番地、皇龍寺跡、芳内里古墳群36号など	蓀谷洞・勿川里瓦窯
	板形	○	○	月城核子、伝臨海殿跡、皇龍寺跡、三郎寺跡、芳内里古墳群40号など	望星里瓦窯、東山里瓦窯、多慶瓦窯、金丈里瓦窯
瓦刀	全面	○		月城核子、伝臨海殿跡	望星里瓦窯
	部分		○	月城核子、伝臨海殿跡、皇龍寺跡など大多数の遺跡	東山里瓦窯、多慶瓦窯
分割界	突起	○(内→外)		皇龍寺跡	
		○(外→内)		慶州龍江洞82番地石室墳	
	紐繫ぎ	○		皇龍寺跡、芳内里古墳群	
	箸	○	○	月城核子、伝臨海殿跡、皇龍寺跡、芳内里古墳群	
筒布	麻	○	○	月城核子、伝臨海殿跡、皇龍寺跡、三郎寺跡、芳内里古墳群などの遺跡	望星里瓦窯、東山里瓦窯、多慶瓦窯、金丈里瓦窯など

一方、粘土円筒の分割を容易にするために、瓦桶の外側には突出した分割界が作られるが、尖った釘や突帯などがこれに用いられた。慶州地域で出土した平瓦では「突起型」「断絶型」「箸形」の分割界が確認されている。最近、突起型の変形と考えられる事例が新たに確認されたが、瓦の凸面に鋭い楔を用いて外から内へと押さえつけて溝をつくる事例である⁴⁶。この例は瓦の成形が終了した後に分離する箇所を表示したものと考えられ、類例がないため不確実ではあるが、粘土円筒から個別の瓦に切り分けるのを容易にするためと見られる（第5図）。

瓦桶にかぶせる瓦布は、瓦桶で成形した粘土円筒を剥がし易くするために用いられる。筒布の材質には麻布、縄文⁴⁷、葦⁴⁸、竹状模骨⁴⁹などが知られているが、慶州地域で製作された瓦は大多数が麻布を利用している⁵⁰。麻布の種類は布目の粗いものから細かいものまで多

様であり、筒布を補修したりつなぎ合わせたりした痕跡も観察される。

以上の内容をまとめると、慶州地域で出土した新羅平瓦の一般的な様相は、第3表の通りである。

IV. 短板叩き瓦の生産と供給および管理

瓦桶の形態と製作技術からみると、新羅の造瓦技術は中国南朝または高句麗や百済の影響を受けて形成されたものである。しかし、円筒桶の導入と中板線条文を叩きつけた造瓦技術が組み合わさることにより、急速な発展を成し遂げたと考えられる。このような発展の直前段階である6～7世紀頃の新羅瓦は、造瓦技術の発展のための多様な試みがなされたものと考えられるが、多様な瓦桶の型式、多様な瓦の文様の存在はこのような試みの産物であろう。

土器製作技法すなわち無瓦桶式で作られた瓦は、短板叩き瓦と同時期に使用されたと推定されるが、その使用時期は明らかでない。ただし、古式蓮華文軒丸瓦と慶州競馬場予定敷地内蓀谷洞・勿川里遺跡で出土した無瓦桶式瓦からみると、おおむね6世紀前半以前に生産されたものと推定される⁵¹。従って、無瓦桶あるいは模骨桶を用いて作られた瓦は、短板叩き瓦とともに使用されたと判断される。特に、仁旺洞556番地遺跡では模骨桶を使用した瓦が多数出土したことから、新羅で模骨桶を用いた瓦生産がなされていたことが知られる（第6図）。

短板叩き瓦は中板や長板叩き瓦と異なり、二次調整を加えたものであって、他の瓦よりも厚く、重く、凸面を緻密にナデ調整している。模骨または円筒桶を用いて成形し、凸面を緻密な回転ナデで調整した後、そのまま使用したり、短板で弧状打捺をしたり、あるいは叩き板をスタンプのように使用して横方向の叩きを加えた（第7～9図）。また粘土円筒を分割する際に生じた分割破面を2～3度ケズリ調整してなめらかにしているが、この特徴は他の瓦では見出し難い。また短板叩き瓦の製作に用いられた叩き板の形態により、1型（線文）、2型（幾何学文）、3型（方郭内部に製作地や工人集団と推定される銘文のあるもの）の合計三種類に分類できる。これ以外にも中板叩きを施した後に方形の印章を押した事例もあるが、この場合は短板叩きではなく中板叩きを使用した場合であるため、短板のような形態の印章を使用して3型と同様の意味を付与し、短板叩き瓦には含めない。

また、3型短板叩き瓦では製作年、製作地、使用先そして工人の名前などの内容を記録した文字が印章として押された。文字を表記した銘文瓦は一般の瓦ではなく、特別な用途をもつ専用瓦と見なせるが、出土した遺跡からも、そのことが見て取れる。短板叩き瓦の使用が月城と伝臨海殿跡周辺、そして蘿井⁵²といった当時の重要施設でのみ確認された点は、瓦の使用先が限定されていたことを示す。もっとも、新羅王京周辺遺跡である掘佛寺

第4表 慶州地域平瓦の属性（崔孟植 2006 を一部改変）

型式	叩き方法	叩き板	内容	備考	出土遺跡	
1型	弧状	線文	線文、集線文	弧状叩き瓦	専用瓦	月城核子、伝臨海殿跡、国立慶州博物館美術館敷地など
2型	横方向	幾何学文	複雑な線と斜線などが結合幾何学文	横方向叩き瓦	専用瓦	月城核子、伝臨海殿跡、皇龍寺跡、国立慶州博物館美術館敷地など
3型	横方向	銘文	「習部」、「井」、「井拵」、「井桃」、「漢」、「漢只」、「南宮之印」、「儀鳳四年皆土」	横方向叩き瓦	専用瓦	月城核子、伝臨海殿跡、月精橋・日精橋、皇龍寺跡、蘿井、仁旺洞 556 番地遺跡、国立慶州博物館美術館敷地など

跡⁵³や羅原里寺跡⁵⁴、東川洞696-2番地遺跡⁵⁵などでも一部短板叩き瓦が出土しているが、これらの遺物はすべて必要に応じて少量が運ばれた交流瓦の事例と考えられる。

以上から短板叩き瓦は生産と消費の両面で一定の制約があったと判断され、出土事例をみても同一の結論を得ることができる⁵⁶。よって新羅で作られた短板叩き瓦は一般の瓦よりも精製で高級な瓦であり、王宮や官庁などに使用するために特別に製作・使用した可能性が高い。一方、慶州地域で初期瓦ないし古式蓮華文軒丸瓦が出土した遺跡を中心に建物の創建および完工年代と瓦の叩き板の形態を基準に区分すると、第5表ようになる。

これによると、短板叩き瓦は無瓦桶式瓦と共伴する傾向を見せており、中板叩き瓦とは異なる様相が確認される。また、新羅王京内で短板叩き瓦が使用された場所をみると、王宮と一部の大型寺院に用いられているのみで、多くの場合は使用されていないことが知られる。また慶州以外の地域である慶山と安東、そして蔚山で用いられた初期瓦には、短板叩き瓦が使用されていたことを確認できる。ただし、これらの短板叩き瓦が現地で生産されたのか、慶州地域から運ばれたのかは不明であるが、短板の叩き目と慶州からの移動距離などを考慮すると、現地で製作したと判断される。

これと関連して、蔚山立岩里遺跡と伴鷗洞遺跡では、伝臨海殿跡の出土例と同一の「井拵」の銘文が短板に押印された銘文瓦がそれぞれ出土している（第10図）。この銘文について金誠龜は、伝臨海殿で使用された文字瓦で、8世紀中葉頃の改修瓦とし、銘文の内容は製作地と製作集団を同時に意味するものと見た⁶⁷。結局この銘文が、慶州の伝臨海殿（東宮）に瓦を供給した「井拵」の瓦工集団が蔚山立岩里に来て瓦を製作した根拠といえる。ただし、慶州では短板叩き瓦で製作されたが、蔚山では中板叩き瓦に方形の短板を追加で押印する様相が確認されるため、慶州と蔚山では瓦製作に使用する叩き板が異なることが分かる。つまり、同じ瓦を製作したとしても地域ごとに相違が存在することを再確認させる。また、蔚山伴鷗洞遺跡で短板叩き瓦とともに出土した古式蓮華文軒丸瓦は慶州月城、

第5表 慶州および地方遺跡出土瓦比較表

番号	地域	遺跡名	創建/完工年代	無瓦桶	短板	中板	長板	印章	備考
1	慶州	月城	101/488	○	○	○		○ (塼)	
2		伝臨海殿址	674/ 679~680	○	○	○		○ (塼)	
3		蓀谷洞・勿川里遺跡 ⁵⁷	6世紀前半 以前~中葉	○	?	○			6世紀前半末~中盤 初:無瓦桶式 6世紀中盤:模骨瓦桶 の使用
4		望星里新羅瓦窯址	679		○	○			'儀鳳四年皆土'銘文 瓦の生産地
5		仁旺洞556番地遺跡	-	○	○	○		○ (瓦)	
6		皇龍寺址	570/643	?	○	○		○ (塼)	
7		蘿井 ⁵⁸	B.C.34 /6世紀		○	○			'儀鳳四年皆土'銘文 瓦(新出) 中板叩き出現
8		芬皇寺	634	?		○			
9		四天王寺址	670/679			○	○	○ (塼)	最初に出現した長板 叩き瓦(?)
10		王井谷第1寺址 (伝仁容寺址 ⁵⁹)	-	○	○	○		○ (塼)	
11		三朗寺址 (三朗寺3キル遺跡 ⁶⁰)	597/?			○	○		長板叩き瓦の普及
12	慶山	林堂遺跡I地区 建物址遺跡 ⁶¹	6世紀初頭	○					円形当て具
13		林堂遺跡I地区 竪穴遺構5号 ⁶²	6世紀		○				
14		大坪洞遺跡 ⁶³	6世紀後半		○				
15	安東	玉洞 住公アパート敷地 内遺跡3号石室墳 ⁶⁴	6世紀		○				横穴式石室の死床部 上に頭枕
16	蔚山	伴鷗洞遺跡 ⁶⁵	7世紀初頭		○	○			線文短板叩き瓦 「井拵」?
17		立岩里遺跡 ⁶⁶ 67号竪穴	679年以後 /8世紀		○	○			中板叩き瓦に方槨の 印章「井拵」を押す。 中板叩き瓦の出現年 代(679年)

雁鴨池、芬皇寺、皇龍寺跡などで出土したものと同型瓦で、6世紀後半から7世紀後半の間に製作されたものと推定されている。これらの瓦が蔚山で使用されるようになった原因として、慶州へとつながる交通の要衝である蔚山に設置された地方官府に使用するために、慶州から派遣された工人が直接生産したものと推定している⁶⁸。つまり、蔚山地域は慶州と密接な関連の中で瓦生産が行われたとみられる。そして蔚山立岩里遺跡で確認された木柵施設と鍛冶工房は蔚山倉坪洞遺跡⁶⁹と大邱漆谷3宅地2区域で確認された統一新羅時代の軍事施設と推定される木柵施設⁷⁰と同一の遺構と判断され、地方に派遣された慶州の官吏

が居住するための施設と推定される。従って蔚山地域の事例からみて、短板叩き瓦が製作された瓦窯は確認できないものの、7世紀後半にはすでに、新羅王京の周辺部、すなわち地方でも短板叩き瓦が生産されていたことが想定できる。

慶山地域でもやはり蔚山と類似した様相を見せるが、林堂遺跡では無瓦桶式で製作した瓦と短板叩き瓦の両方が確認される（第11図）。無瓦桶式の場合、凹面に円形の当て具痕が観察され、短板叩き瓦は格子文と線文が確認される。周辺に建物跡と生活遺跡が立地することから、これらの瓦を直接生産していたものと推定される。瓦の凹面に円形の当て具痕のある無瓦桶式の瓦は、土器を製作していた技術者が瓦を製作したために現れた過渡期な生産様相と判断されている。慶山林堂遺跡I地区で確認されたこれらの瓦は、共伴した土器から6世紀第1四半期～第2四半期に製作されたものと考えられる。よって、同遺跡における瓦の製作時期は、慶州蓀谷洞・勿川里遺跡におけるそれと同時期であることが知られる。

安東の事例は1件しかないが、横口式石室墳に追葬された被葬者の枕に短板叩き瓦を使用した点に特徴がある。短板叩き瓦は弧状叩きによって製作されているが、これは蔚山や慶山に見られる短板叩き瓦と同一である。出土遺物から6世紀中葉～末と推定される（第12図）。

ここで、新羅王京地域と地方で使用された短板叩き瓦にはどのような差があるのか検討する必要がある。慶州で短板叩き瓦が用いられた遺跡としては、月城や臨海殿のような国家的な重要性をもつ建物での使用事例が確認されている。これらの短板叩き瓦は二種類に区分できるが、前者は短板で弧状叩きの瓦、後者は印章とともに方郭の内部に各種の文字や符号などを彫ったものである。前者を「雁鴨池1類（弧状叩き）」、後者を「雁鴨池2類（横方向叩き）」として区分している⁷¹。しかし同一の短板叩き瓦でありながら異なる叩き方で用いる点を考慮すると、少なくともこれら二種類の短板叩き瓦は、使用目的や供給方法からみてその性格が異なるものと考えられる。弧状叩きを施した短板叩き瓦は凸面を叩く製作工程としての短板叩きが中心になるが、横方向叩きの短板叩き瓦は、叩くことを通じて伝達しようとするその意味自体が重要である。すなわち、短板に刻まれた様々な意味をもつ文字が中心となる。従って短板叩き瓦で確認されたこのような相違点を考えると、弧状叩きは一般の瓦で、常に供給の要請に従い生産された瓦である一方、横方向叩きは特別な目的のために使われる瓦で、一度に大量に必要な際に生産され、象徴性を持つ高級な瓦と言える。要約するならば、一般の瓦と、使用先が指定された「注文型高級瓦」とも言えよう。

新羅文武王19年に行われた大規模な土木工事の実態が、王宮および東宮の建築であったことを考慮すれば、それは王室の権威を高めるためであったろう。このように当代の記念すべき事績を後世に残す目的が託された記念物として製作された瓦が、まさに「儀鳳四年

皆土」銘文瓦であり、当時瓦を供給していた各地の生産集団を区分するために符号や文字を表記したものと見ることができる。また、当時瓦生産において官印が関与した様相を見ると、「習部」、「井」、「井柝」、「井桃」、「漢」、「漢只」、「南宮之印」、「儀鳳四年皆土」銘文瓦に表示された内容は全て、新羅六部内部の瓦窯または瓦工の性格と短板叩き瓦の使用先などを表示したものと見れば良いであろう。上で見たように、短板叩き瓦は作業の効率では劣るが、数回の追加調整をしている点で単純に効率性のみでは説明できない部分がある。従ってこれらの短板叩き瓦は、宮城あるいは官庁などに納品される瓦に限定して適用される追加作業が行われたものと考えられ、これ以後円筒桶に粘土板を巻付ける方法で製作された中板瓦が大量に生産されるようになると、徐々にその機能が消滅したのであろう。結局、横方向叩きの短板叩き瓦は7世紀末の慶州地域で行われた大規模な建物群の新築によって短期間のうちに大量の瓦を一度に供給するために生産され、使用目的の特殊性が反映されたものと見ることができる⁷²。また、短板叩き瓦に転写された短板の形態が個体間で類似することから、当時瓦の大量生産に際して、同時に作業したために叩き板を共有したり、類似する文様を使用したりしたものが見られる。

これを裏付ける事例としては、地方で製作・使用された短板叩き瓦があげられる。慶山林堂遺跡I地区や安東玉洞遺跡3号横口式石室墳から出土した短板叩き瓦は、凸面に線文または格子文が刻まれた短板を使用し、弧状叩きを加えた事例である。このような製作技法は、上で言及した「雁鴨池1類」と同一と見なせると同時に、横方向叩きの短板叩き瓦である「雁鴨池2類」とは厳然と区別される。そして慶州以外の地方の生活遺跡と墓で出土した瓦は、無瓦桶式である。弧状叩きの短板叩き瓦（雁鴨池1類）を用いた事例は見られるが、慶州地域で確認される短板叩き瓦のような、使用先が制限されて供給された様相とは異なる。叩き板の形態もやはり異なるが、このような様相は、上で検討したように短板叩き瓦の生産が地方でも行われたためと考えられる。そして地方でも無瓦桶式と円筒桶による短板叩き瓦の生産が行われ、瓦が次第に普及しながら中板叩き瓦の生産へと転換するが、慶州に見られる横方向叩きの短板叩き瓦は製作されなかった。

こうした様相は結局、横方向叩きの短板叩き瓦が一般の瓦ではなかったということを逆説的に示している。従って慶州では、無瓦桶式（6世紀第1四半期以前～第2四半期）→弧状叩き（679年以前）・横方向叩きの短板叩き瓦（679年）→中板叩き瓦（679年前後）→長板叩き瓦（9世紀頃）の順序で変化し、地方では無瓦桶式（6世紀第1四半期～第2四半期）→弧状叩きの短板叩き瓦（6世紀第3四半期～679年以前）→中板叩き瓦（679年以後）→長板叩き瓦（9世紀中葉）⁷³の順序で造瓦技法が変化した。そしてこれらの地域で行われた瓦の生産と消費は、新羅王京で確認された瓦の供給方法と同一であると考えられる。しかし、横方向叩きの技法で製作された短板叩き瓦の生産は行われなかった。その原因は、瓦

の使用目的と供給関係が異なっていたためと判断される。この点が新羅王京と地方の瓦の生産および消費過程における差である。

また、短板叩き瓦から中板叩き瓦へと製作技術が変化するものの、短期間二つの製作技法が併用されたことも確認された。このような共存現象は、短板叩き板が官印と同一の用途で使用されたこと、つまり瓦製作自体は中板叩き板で行われたが、瓦の使用先や製作者を表示する方法として短板叩きが継続して用いられたことにより、起きたものである。従って、短板叩きと中板叩きが共存する時期には、中板叩き板が主に用いられ、短板叩き板はその形態的特徴により、印章として使用されたと考えられる。このような様相は、以後統一新羅瓦のうち銘文瓦の製作において、瓦の使用先である寺の名称を方郭の中に表記する方法として受け継がれていく⁷⁴。まとめると、新羅は7世紀末、正確には679年以後、短板叩き瓦から中板叩き瓦へと生産方法が変化⁷⁵するが、これらの製作技術が共存する時期がある。そして短板叩き瓦の痕跡は中板または長板叩き板の中に方形の空間として残ることになる。この方形空間は、瓦の製作日、製作場所、製作者、使用先などの瓦生産と関連した情報がこめられる空間であり、短板叩きの原型とも言える「印章」の機能が受け継がれたものと言える。

新羅で短板叩き瓦が生産された時期について、従来学界では文武王19年、すなわち「儀鳳四年皆土」銘短板叩き瓦の生産に合わせて679年という絶対年代を基準に考えてきた。しかしこのような見解は、銘文資料に安住し、慶州と地方で出土した短板叩き瓦の性格を明確に認知できなかった結果と考えられる。特に慶州蘿井で出土した「儀鳳四年皆土」銘中板叩き瓦（第13図）と、蔚山立岩里遺跡・伴鷗洞遺跡で出土した「井拵」銘中板叩き瓦は、短板および中板叩き瓦が少なくとも679年からは製作されていたことを立証する。つまり、中板叩き瓦の製作が始まっていたと推定される679年に横方向叩きの短板叩き瓦が生産されたと見ることができる。従って、慶州で弧状叩きの短板叩き瓦が製作された時期は679年以前と判断され、慶山と安東そして蔚山など地方で確認された短板叩き瓦の出土事例からみると、少なくとも6世紀第2四半期の間に新羅にすでに弧状叩きの短板叩き瓦を生産する体系が備わっていたとみなせる。そして金基民の指摘の通り、少なくとも金海府院洞遺跡⁷⁶など一部の地域では遅くとも5世紀初頭から瓦生産が行われており（第14図）、慶山林堂遺跡、慶州蒸谷洞・勿川里遺跡は6世紀第1四半期以前から無瓦桶式の瓦生産が行われていたと考えられる⁷⁷。

V. おわりに

慶州地域で瓦が製作された時期を明らかにするためには、今後多くの資料が得られることを期待しなくてはならない。無瓦桶作法あるいは模骨桶によって製作された短板叩き瓦

が初期に使用された後、無瓦桶式で成形した瓦はすぐに消滅するが、これは結局瓦桶を利用した瓦製作法の効率性に起因するものと判断される。慶州地域で確認される短板叩き瓦は宮城や官庁などで限定的に使用された可能性が高い。しかし短板叩きで作った瓦は、たとえ中板叩きで製作された瓦よりも生産性と効率的な面で劣っていても、非常に丁寧に作られており、叩きを施さない瓦の背面に対しては緻密なナデを全面に施している。このような作業工程は単純に作業能率だけで説明するのが難しい部分であり、これら短板叩き瓦の製作は宮城あるいは官庁などに納付される瓦に限定されていた可能性がある。すなわち短板叩き瓦は一定の目的をもって製作された可能性が提起される。

慶州地域で印章瓦が使用される時期は、無瓦桶技法や短板叩き瓦が使用された時期よりも新しいものと推定される。特に百済の印章瓦は主に文字が使用されるのに対し、新羅は符号や記号が多く見られる。このような差は印章瓦を製作していた工人集団の性格差と見ることができ、新羅で印章瓦が製作される時点は679年以後と推定される。そして印章瓦は慶州地域で一時的に使用された後に消滅したが、その原因としては円筒桶と中板叩きで製作された「新羅瓦」が全国的に普及し、高句麗と百済の造瓦技術が淘汰されたことが考えられる。

従って、新羅瓦においては無瓦桶と桶を使用した短板叩き瓦が初期に製作されるが、すぐに線条文の中板叩き板が普及して弧状叩き技法の短板叩き瓦は消滅する。また679年に製作された横方向叩きの短板叩き瓦はすでに中板叩き瓦が製作されていた時期に作られた瓦であり、製作者と使用先が限定された特殊な瓦で、一般の建物よりは宮城のような重要な建物にのみ使用されたものと判断される。これは地方で無瓦桶技法の瓦や弧状叩きの短板叩き瓦が生産・消費された点と比較すると、新羅王京での瓦の受給関係の特殊な一面を見せるものと言える。結局このような多様な姿の瓦製作技法は、統一以後円筒桶と中板線文叩きに代弁される「新羅瓦」へと変化するが、このような姿は新羅が達成した三国統一による最終結果であると言える。

註

- 1 「儀鳳四年に皆土した」という意味の文句が刻印されたこの平瓦については多くの先学の意見が提示されているが、その内容は「679年に文武王が大規模土木工事を行ったことを記念したもの」という解釈に集中している。ここで「皆土」は仏典にある「国土」または「全土」という意味の単語であり、「率土皆我国家（この土地の全てのものを我が国が従える。）」という意味に解釈される。つまり、679年に新羅が主導した三国統一を記念するものと考えられる（大坂金太郎「儀鳳四年皆土」在銘新羅古瓦『朝鮮學報』第53輯、朝鮮學會、1969年）。また周知の通り、唐の年号である儀鳳は元年（676）から3年（678）までの3年間用いられた後に調露元年（679）、永隆元年（680）に変更される。新羅において儀鳳4年（679）まで唐の年号を使用せざるをえなかった原因は、当時進行していた唐との戦争にあると考えられるが、東宮の創建時に永隆年号の施行を知らなかったの

- かについては再考の余地がある。むしろこれ以後の開耀（681）、永淳（682）、弘道（683）と唐高宗の末年になって毎年年号を制定していた唐の内部事情により、新羅が年号をすぐに変更し、適用することが難しかった可能性が高い。
- 2 国立中央博物館『統一新羅』2003年。
 - 3 日本では、「権威建築物」と同一の意味で「記念的建造物」と呼んでいる（鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人編『記念的建造物の成立』シリーズ都市・建築・歴史1、東京大学出版会、2006年）。
 - 4 例えば、仏国寺釈迦塔で発見された『無垢淨光大陀羅尼經』は704年に中国から訳経された仏典である。經典に「則天文字」が使用されているため、690年から704年の間に刊行された經典と推定されている。仏国寺の創建年代については論争があるが、新羅景德王10年（751）金大城が創建したという『三国遺事』の内容を信頼するならば、刊行後ほどなく新羅に伝えられたことが分かる。また黄福寺跡の三重石塔の舍利容器（706）の銘文にも『無垢淨光大陀羅尼經』が奉納されたという記録があることを考慮すれば、この時期に唐と新羅の間で行われた文化交流は、おおむね同時期性をもつと言える。
 - 5 叩き板の形態である短板、中板、長板による叩き方法と、印章の捺印方法について扱う。
 - 6 瓦の素地の加工方法と瓦桶の特徴、そして造瓦工程で確認された焼成方法と特徴について扱う。
 - 7 金富軾『三国史記』卷第一 新羅本紀 第一 祇摩尼師今 11年条。“夏四月 大風東來 折木飛瓦至夕而止”
 - 8 金富軾『三国史記』卷第二 新羅本紀 第二 助賁尼師今 4年条。“夏四月 大風飛屋瓦”
 - 9 김성구 『옛기와』 대원사, 1992年, pp.60・61.
 - 10 申昌秀「三國時代 新羅기와의 研究－皇龍寺址 出土 新羅기와를 中心으로－」『文化財』第20號、文化財管理局 文化財研究所、1987年、pp.1-57。
 - 11 朴洪国『三國末～統一初期 新羅瓦塼에 대한 一考察－月城郡 内南面 望星里 瓦窯址와그 出土 瓦塼을 中心으로－』東国大学校大学院美術史学科碩士學位請求論文、1986年。
朴洪国「月城郡 内南面 望星里 瓦窯址와 出土 瓦塼에 對한 考察」『嶺南考古學報』5、嶺南考古學會、1988年、pp.57-96。
 - 12 高正龍「第2節 統一新羅時代瓦の編年－感恩寺・佛国寺創建瓦の検討－」『奈良県立畝傍高等学校（旧制畝傍中学校）所蔵考古資料目録Ⅰ－国外之部－』社団法人榎原考古学協会、2009年、p.134、挿図13。
 - 13 高正龍は、仏国寺で出土した鬼面唐草文軒平瓦についての検討を通じ、A型式とB型式の2型式が同一の様相で変化する点に注目し、工人集団や瓦窯の差とみなせるとした（高正龍（前掲註12）、p.144）。
 - 14 崔兌先「平瓦製作法の 變遷에 대한 研究」慶北大学校大学院考古人類学科碩士學位論文、1993年、p.42。
 - 15 崔兌先「平瓦製作法の 變遷에 대한 研究」（前掲註14）、p.54。
 - 16 趙成允「慶州 出土 中板 打捺文樣 평기와의 製作時期와 그 意味」『佛教考古学』第2号、威徳大学校博物館、2002年、pp.157-170。
 - 17 趙成允「新羅 瓦로 본 雁鴨池 築造에 대하여」『佛教考古学』第6号、威徳大学校博物館、2006年、pp.57-74。
 - 18 慶州地域において統一新羅時代末まで長板叩き瓦が使用されなかったとみる見解は、言い換えれば当時地方で先に長板叩き瓦が発生してからほどなく造瓦技術（叩き板）が慶州に入ってきたという見方である。しかしこれは当時新羅王京を除外した地方社会、すなわち九州五小京に該当する地域

- で使用された長板叩き瓦が中心地で遅れて普及したという見解であり、容易には理解しがたい(조성윤 「新羅 長板 打捺文様 평기와의 慶州製作與否에 대하여」 『梨花史學研究』 第30輯、梨花史學研究所、2003年、pp.65-77)。
- 19 東国大学校埋藏文化財研究所 『三朗寺 3 길遺蹟』 현장설명회자료 1、2000年。
- 20 車順喆 「경주지역 평기와의 타날형태변화에 대한 검토 -단편 중판 입장 그리고 장판으로-」 『文化財』 第40號、2007年、pp.73-104。
- 21 軒丸瓦の裏面に円筒形丸瓦を取り付けた後、粘土円筒の半分を切開して軒丸瓦をつくる方法。
- 22 金基民 「新羅기와 製作法에 관한 研究 -慶州 勿川里 出土기와를 중심으로-」 東亞大学校大学院 史学科碩士學位論文、2002年。
- 23 沈相六 「百濟時代 印刻瓦에 관한 研究」 公州大学校大学院史学科碩士學位論文、2005年、p.20。
- 24 この時期の瓦范はほとんどが木製と推定される。初期蓮華文軒丸瓦と推定される遺物の表面をみると、木目が容易に観察される。
- 25 国立文化財研究所 『將島 淸海鎮 遺蹟發掘調査報告書 I』 2001年。
国立文化財研究所 『將島 淸海鎮 遺蹟發掘調査報告書 II』 2002年。
- 26 忠南大学校百濟研究所 『永同 稽山里遺蹟』 2002年。
- 27 李仁淑 「統一新羅~朝鮮前期 평기와 製作技法의 變遷」 慶北大学校大学院考古人類学科碩士學位論文、2004年、pp.99-103。
- 28 国立慶州文化財研究所 『慶州 仁旺洞 556・566番地 遺蹟 發掘調査報告書』 2003年、p.113。
- 29 車順喆 「경주지역 평기와의 타날형태변화에 대한 검토 -단편 중판 입장 그리고 장판으로-」 (前掲註20)、p.95。
- 30 仏教寺院での瓦使用問題については別稿で論ずる。しかし新羅法興王14年(527)に起こった異次頓の殉教以後、法興王20年(533)から建設が始まり新羅眞興王5年(544)に完工した興輪寺や眞興王15年(553)に宮殿を建てた後寺院に変わった皇龍寺は眞平王6年(584)に金堂を完工し、善徳女王12年(643)に九重木塔が完成した内容からみて、6世紀代には幅広く瓦が使用されていたことが知られる。ただし初期寺院と関連した内容が文献に登場する点から、その始まりは5世紀代の可能性が高い。
- 31 慶州地域で瓦の需給関係が確認された遺跡は、ほとんどが遺物が地表採集されたものであったが、最近発掘調査が活発に行われるにつれて以前よりも精密な比較考察がなされている。需給関係についての議論がなされている論文は、次の通りである。
濱田耕作・梅原末治 『新羅古瓦の研究』 京都帝国大学文学部考古學研究報告 第十三冊、1934年。
金東賢・金周泰・禹炳益・鄭在鏞・許萬夏・申榮勳 編著 『新羅의 기와』 韓国建築史大系 V 建築과 文様 (上)、東夷文化硏院・東山文化社、1976年。
朴洪国 「慶州地方에서 出土된 文字銘瓦」 『全国大学生學術研究發表論文集』 5 (人文分野) 고려대학교 학도호국단、1980年、pp.93-120。
朴洪国 「月城郡 内南面 望星里 瓦窯址와 出土 瓦磚에 對한 考察」 (前掲註11)、pp.57-96。
国立中央博物館 『井内功寄贈瓦軀 圖録』 国立中央博物館所藏品圖録第7輯、1990年。
国立慶州博物館 『新羅瓦磚』 2000年。
威徳大学校博物館 『慶州南山 長倉谷 新羅瓦窯址 地表調査報告書』 2001年。
国立慶州文化財研究所 『慶州南山 石塔發掘・復元整備 報告書』 2004年。
車順喆 「大邱市 漆谷 3地區 建物址遺蹟 發掘調査 概報」 『제9회 영남매장문화재연구원 조사연구 발표회』 영남매장문화재연구원、1998年、pp.92-95。
차순철 「慶州地域 평기와 受給關係에 대한 일고찰 -석장사지 出土 평기와를 중심으로-」 『신라

- 학연구』 제4집, 위덕대학교부설 신라학연구소, 2000年, pp.229-252.
- 차순철 「慶州地域 寺院出土 平瓦의 需給關係 考察-專用瓦 共用瓦 交流瓦를 中心으로-」 『불교 미술사학』 제5집, 통도사성보박물관 불교미술사학회, 2007年, pp.527-554.
- 韓國文化財保護財團 『慶州 東川洞 696-2番地 遺蹟-공동주택 신축부지 발굴조사 보고서-』, 2010年.
- 32 山崎信二 「7世紀 後半의 기와로 본 朝鮮三國과 日本의 關係」 『韓日文化財論集 I』 국립문화재연구소, 2007年, pp.222-274.
- 33 包み込み式製作技法とは、儀鳳四年皆土（679）銘文瓦が製作された時点で生産された統一新羅の無類式忍冬文軒平瓦に見られる特徴的な製作技法で、軒平瓦の文様面と平瓦を接合した後、上面と下面を粘土で補い、平瓦が軒平瓦の中に包み込まれるような格好にする接合法である。
- 34 山崎信二 「平瓦製作法からみた古代東アジア造瓦技術の流れ」 『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』 科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書, 2009年, p.3.
- 35 佐川正敏 「中国における造瓦技術の変遷-「粘土紐巻き作り」から「粘土板巻き作り」への転換を中心に-」 『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』 科学研究補助金（基盤研究A）研究成果報告書, 2009年, pp.78-80.
- 36 集安地域に所在する高句麗古墳である臨江墓で出土した平瓦のうち、一枚作りで製作された事例が確認された点は、日本で一枚作りが出現した背景を探る上で重要な意味をもつ。
- 주홍규 「集安지역 高句麗기와의 製作技法과 변천-일본 소재 기와를 중심으로-」 『韓國上古史學報』 第66号, 韓國上古史學會, 2009年, p.91.
- 37 明日香村教育委員会文化財課 『飛鳥の宮殿-古代都市“飛鳥”を深る-』 飛鳥の考古学図録④, 2005年.
- 38 現在国内で製作されている伝統瓦の製作技法と古代の造瓦技法については、次の文献が参考になる。
- 장경호 「한국 전통기와 製作技法과 그 규격에 관한 고찰」 『초우 황수영박사 고회기념 미술사학논총』 통문관, 1988年.
- 국립문화재연구소 『製瓦匠 (중요무형문화재 제91호)』 1996年.
- 宋應星著・崔炷譯 『天工開物』 전통문화사, 1997年.
- 최맹식 「II.삼국 평기와 製作技法의 특징」 『삼국시대 평기와 연구』 주류성, 2006年, pp.45-203.
- 39 최맹식 『삼국시대 평기와 연구』 주류성, 2006年, p.53.
- 40 최맹식 「평기와 연구의 최근 동향」, 『백제연구』 제34집, 충남대학교 백제연구소, 2001年.
- 41 崔兌先は、叩き板の大きさを長さ30~40cm程度の平瓦を基準に、個々の叩きが何回施文されているかを区分した。これに従えば、叩き回数は実際に作業した最大値となる（崔兌先「平瓦製作法の變遷에 대한 研究」 (前掲註14)、pp.17-21)。
- 42 趙成允 「慶州 出土 中板 打捺文様 평기와의 製作時期와 그 意味」 (前掲註16)、pp.157-170.
- 조성운 「新羅 長板 打捺文様 평기와의 慶州製作與否에 대하여」 (前掲註18)、pp.65-77.
- 43 国立慶州博物館 『文字로 본 新羅-新羅人의 紀錄과 筆跡-』 2002年, pp.86・87, No. 125-132.
- 44 최맹식 『삼국시대 평기와 연구』 (前掲註39)、p.111.
- 45 최맹식 『삼국시대 평기와 연구』 (前掲註39)、pp.113-120、圖面28-32、圖版23-25.
- 46 国立慶州文化財研究所 「경주시 용강동 82번지 석실분 발굴조사보고」 『文化遺蹟發掘調査報告 (緊急發掘調査報告Ⅳ)』 2009年, p.137、圖版30.
- 47 高句麗の官房遺跡（漣川蘆古壘、漣川郡堂浦城、峨嵋城など）と、百濟地域（公州艇止山、扶余扶蘇山城、大田月坪洞、鷄足山城、益山王宮里、順天劍丹山城など）に事例がある（최맹식 『삼국시대 평기와 연구』 (前掲註39)、pp.127-131)。
- 48 大田月坪洞山城で確認されている（国立公州博物館 『大田月坪洞遺蹟』 1999年）。

- 49 国内では出土事例が知られておらず、主に日本の古代寺院で確認されるという (최명식 『삼국시대 평기와 연구』 (前掲註39)、pp.134・135)。
- 50 瓦桶に用いられた筒布の材質が異なる点について地域的な特徴を論じているが、大多数は麻布を用いている。よって山城のような一部の遺跡でのみ葦または他の材料が利用されているのは、一般的でない現象と判断される。よって筒布に麻以外の材料を利用した場合は、むしろ作業工程の差や材料選別において造瓦工人の選択が働いた可能性が高いと考えられる。そしてこれ以外にも、材料を調達するのが難しい劣悪な作業環境、すなわち麻を使用するのが困難な状況もありえたと考える。
- 51 韓国文化財保護財団『慶州 競馬場 豫定敷地 C-I 地區 發掘調査報告書』1999年。
国立慶州文化財研究所『慶州 蒸谷洞・勿川里遺蹟-慶州競馬場豫定敷地 A地區-』2004年。
- 52 中央文化財研究院・慶州市『慶州 蘿井』2008年。
- 53 文化財研究所・慶州古蹟發掘調査団『堀佛寺 遺蹟發掘調査報告書』1986年、p.254、圖版62-6。
- 54 朴洪国「慶州 羅原里 五層石塔과 南山 七佛庵磨崖佛의 造成時期-최근 수습한 銘文瓦片을 중심으로-」『科技考古研究』第4號、아주대학교 박물관、1998年、p.98。
- 55 韓国文化財保護財団『慶州 東川洞 696-2番地 遺蹟-공동주택 신축부지 발굴조사 보고서-』(前掲註31)、p.170、No.265。
- 56 慶州市内に位置する新羅王京地域の主要遺跡を除外した状態で短板叩き瓦が出土した事例を調べると、大量に使用されたというよりは個々の瓦が運ばれて使用されたものと判断される。よって短板叩き瓦は瓦窯で生産された後、一般の建物に使用されたのではなく、特定の建物の建築に選別されて供給された可能性が高い。
- 57 韓国文化財保護財団『慶州 競馬場 豫定敷地 C-I 地區 發掘調査報告書』(前掲註51)。
- 58 蘿井遺跡で出土した瓦のうち「儀鳳四年皆土」銘文瓦は、格子文と円弧文が重複した文様を叩きつけた後、銘文が刻まれた短板で叩いたもので、二重の叩きがなされている。先行する叩き板は文様の長さからみて短板というより中板の叩き板と推定される。よってこのような推定が妥当であるならば、短板叩きが使用された時期(679年)にはすでに中板叩き瓦が生産・使用されていたことになる。また、報告者は蘿井で出土した「儀鳳四年皆土」銘文瓦を伝臨海殿で出土したものより古式と見ている。叩きの後ナデ調整の有無、文字の形態が古拙である点をその根拠にあげているが、文字の書体が右書ではなく反転した左書であるため、筆者は同時期に製作された瓦における型式差と見る。
中央文化財研究院・慶州市『慶州 蘿井』(前掲註52)、p.464、挿図7参照。
- 59 국립경주문화재연구소 경주시『傳 仁容寺址 發掘調査中間報告書』2009年、p.53、圖面9、No.35・36、およびp.54、圖面10、No.37。
- 60 東国大学校埋藏文化財研究所『三朗寺3길遺蹟』현장설명회자료1、2000年。
- 61 嶺南文化財研究院『경산 임당택지개발사업지구 (I 지구) 내 慶山 林堂洞 建物址 遺蹟』2008年、p.364、圖面 270。
- 62 嶺南文化財研究院『慶山林堂洞遺蹟 I-F, H地區 및 土城-』1999年、p.200、圖面 87、および p.212、圖面95。
- 63 嶺南文化財研究院『慶山 大坪洞遺蹟 II』2005年、p.409、圖面 242、およびp.410、圖面243。
- 64 東洋大学校博物館『安東 玉洞 住公아파트敷地内 遺蹟』2007年、p.70、圖面 36。
- 65 蔚山伴鷗洞遺跡の I-1号、I-2号、I-5号建物跡と III-1号建物跡、I-9号土坑、III-44号土坑から短板叩き瓦の出土が報告されている。
울산발전연구원 문화재센터『울산 반구동유적-중구 반구동 303번지 아파트신축부지 발굴조사 보고서-』2009年。

- 66 蔚山立岩里遺跡で出土した「井柝」銘瓦は中板叩き瓦の上に短板印章を押したもので、短板叩き瓦というよりは中板叩き瓦に属する。ただし、銘文を押した印章の形態が短板と同一であることから、中板叩き瓦が製作された後も短板印章がそのまま使用されていたものと推定される。従って、この遺物は慶州蘿井で確認されたものと同様、中板叩き板と短板印章がともに用いられている時期を示している（蔚山文化財研究院『蔚山立岩里遺蹟』2005年、p.240、図面184、No.276）。
- 67 김성구 「蔚山の 신라기와」 『유적과 유물로 본 울산의 생산과 유통』 울산광역시 한국문화재보존재단、2009年、p.37。
- 68 김성구 「蔚山の 신라기와」 （前掲註67）、p.38。
- 69 嶺南文化財研究院『蔚山倉坪洞遺蹟』2003年、p.5、図面4。
- 70 韓国文化財保護財団『大邱 漆谷3宅地(2・3區域)文化遺蹟 發掘調査 報告書(Ⅱ)』2-나區域(本文)、2000年、p.1、挿図1。
- 71 趙成允 「慶州 出土 中板 打捺文様 평기와의 製作時期와 그 意味」 （前掲註16）、p.160。
- 72 すでに指摘されているように、679年に製作された「儀鳳四年皆土」銘短板叩き瓦は新羅文武王が三国統一をなし挙げた成果「率土皆我國家（この土地のすべてのものを我が国が従える）」という意味に解釈される）を記念するための記念物と考えられ、これを記念するために文武王19年に行われた大規模土木工事（臨海殿創建）に使用された瓦と考えられる。
- 73 扶餘扶蘇山城で出土した「會昌七年(847)丁卯年末印」銘文瓦と清州興德寺跡で出土した「大中三年(849)」銘平瓦そして益山弥勒寺跡と洪城神衿城で出土した「大中(847~860)」銘文瓦から、少なくとも新羅文聖王代には長板叩き瓦に印章を使用した捺印または叩き板そのものの使用が見られ、長板叩きによる瓦製作がなされていたことが分かる。
国立扶餘文化財研究所『扶蘇山城Ⅲ』1999年、pp.393-395。
国立扶餘文化財研究所『扶蘇山城：整備에 따른 緊急發掘調査』1999年、p.107。
清州大学校博物館『清州 興德寺址 發掘調査報告書』1986年、p.60。
国立扶餘文化財研究所『彌勒寺 遺蹟 發掘調査報告書Ⅱ』（圖版編）、1996年、p.598。
李康承・朴淳發・成正鏞『神衿城』忠南大学校博物館、1994年。
- 74 このように方郭の内部に寺院名称を表示する例は、慶州四天王寺の銘文瓦に始まり高麗時代まで受け継がれる。特に四天王寺では方郭の内部に多様な書体を用いたが、多様な姿の銘文瓦が統一新羅時代に製作されたものと考えられる。しかし最近このような銘文瓦について、高麗時代以後のものとする見解が提示された。これに対し筆者の考えは別稿を通して扱うが、寺院の名称が入った銘文瓦をすべて羅末麗初時期(9~13世紀)と見る点については首肯し難い。それは、統一新羅時代にも器物に寺院名を表記した事例が存在する点のためである。九黄洞苑池遺跡では「芬王」銘図章が押捺された土器が複数点出土したことから、器物に使用場所を表記したことが知られる。
柳煥星「羅末麗初 慶州 出土 寺刹銘 平기와 研究」慶州大学校大学院文化財学科碩士学位論文、2007年。
国立慶州文化財研究所『신라승결 1천년 발굴조사 32년』2006年、p.79。
- 75 趙成允は明確な資料を提示していないが、東川洞王京遺蹟で出土した土器から以下の様に述べている。すなわち、7世紀まで遡りうる短脚高坏と9~10世紀まで下がる突帯付土器、平瓶などとともに多くの中板叩き目の平瓦が出土している一方、新羅時代と推定される長板叩き目の平瓦が出土していない点、蔚山芳里遺跡でも長板叩き平瓦が出土していない点からみて、慶州における中板叩き平瓦の上限を7世紀末、下限を9~10世紀ごろとみている。
- 76 東亞大学校博物館『金海 府院洞 遺蹟』1981年。
- 77 金基民「新羅기와 製作法에 관한 研究-慶州 勿川里 出土기와를 중심으로-」(前掲註22)、

pp.32 - 42.

上記以外の参考文献

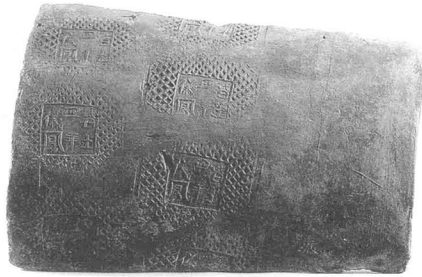
김유식 「7~8世紀新羅기와의 需給」 「기와를 통해 본 고대 東アジア 삼국의 대외교섭」 국립경주박물관, 2000年.

東洋大学校博物館 『安東 玉洞 住公아파트敷地内 遺蹟』 2007年.

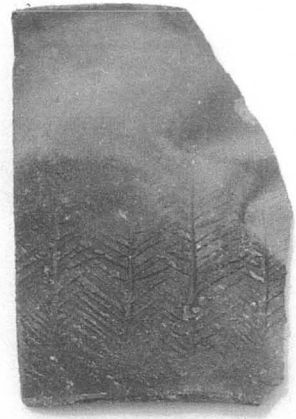
蔚山文化財研究院 『蔚山立岩里遺蹟』 2005年.

주홍규 「集安지역 高句麗기와의 製作技法과 변천-일본 소재 기와를 중심으로-」 『韓國上古史學報』 第66號、韓國上古史學會、2009年

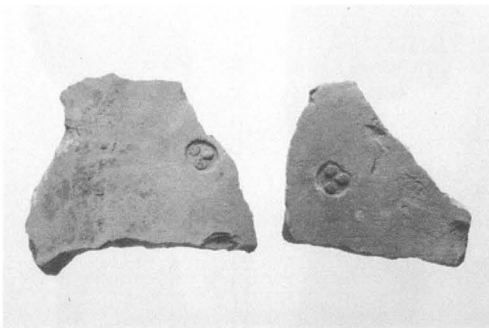
차순철 「慶州地域 平瓦 수급관계에 대한 일고찰-석장사지 出土 平瓦를 중심으로-」, 『신라학연구』 제4집, 위덕대학교부설 신라학연구소, 2000年.



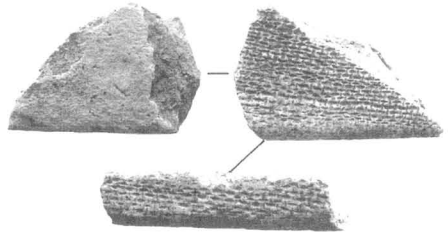
第1図 「儀鳳四年皆土」銘短板叩き瓦



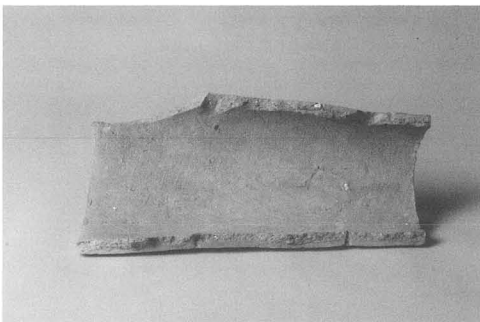
第2図 慶州三朗寺3キル遺跡出土長板叩き瓦



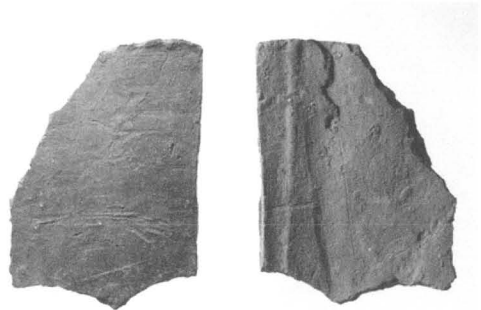
第3図 慶州仁旺洞556番地遺跡出土の印章瓦



第4図 高句麗臨江塚出土の一枚作り平瓦



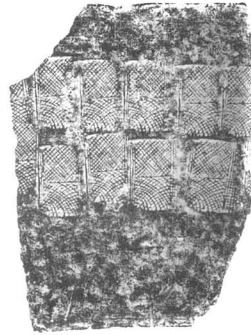
第5図 慶州龍江洞石室墳出土平瓦にみられる
楔形の分割痕跡



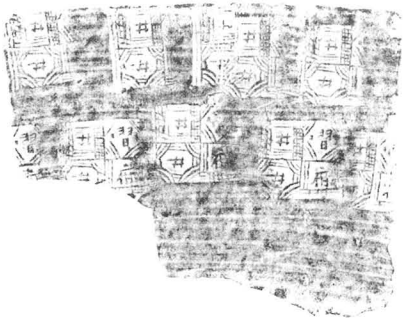
第6図 慶州仁旺洞556番地遺跡出土の模骨桶
製作の瓦



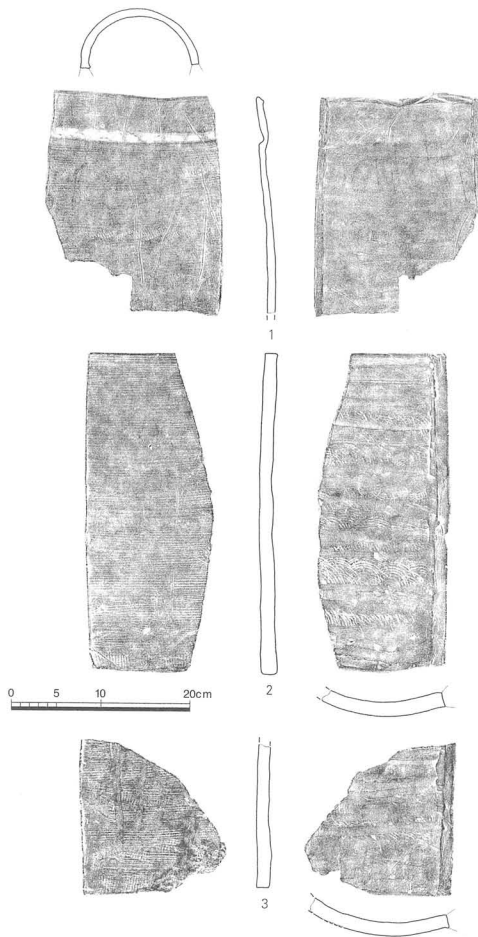
第7図 弧状短板叩き瓦



第8図 横方向短板叩き瓦（幾何学文）

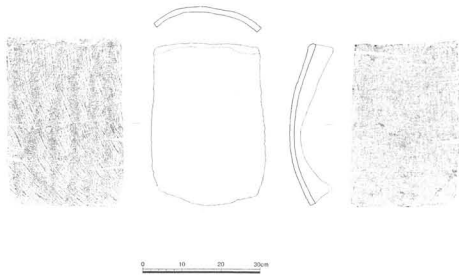


第9図 横方向短板叩き瓦（銘文）

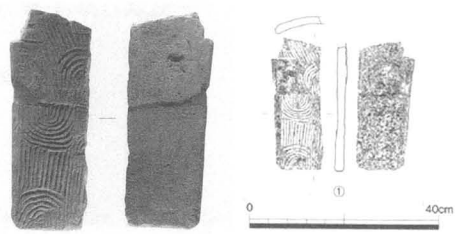


第10図 伝臨海殿出土「井拵」銘短板叩き瓦

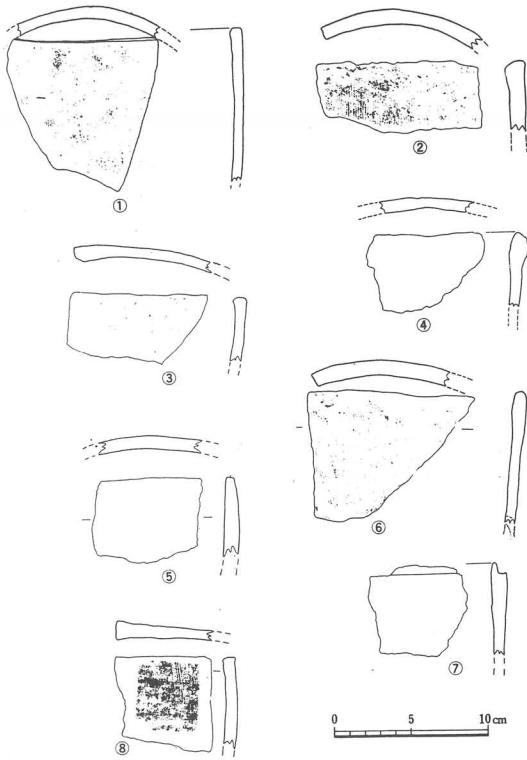
第11図 慶山林堂遺跡出土瓦



第12図 安東玉洞遺跡出土瓦



第13図 慶州蘿井遺跡出土「儀鳳四年皆土」銘中板叩き瓦



第14図 金海府院洞遺跡出土瓦

新羅 短板打捺 平瓦의 出現과 意味에 對한 檢討
- 弧狀打捺과 橫方向打捺의 區分과 特徵 -

차 순 철

요 지 신라기와 연구에 있어서 가장 중요한 유물로 인정되고 있는 ‘의봉사년개토(儀鳳四年皆土)’ 명 단판기와는 679년이라는 절대연대를 가지고 있다. 이 기와의 존재를 통해서 우리는 신라의 발전된 모습을 떠올리지만, 8세기에 들어서면서 당시 동아시아 전체를 뒤흔든 정치적 격변과 혼란을 수습한 당(唐)과 신라 그리고 일본 등 동양 삼국이 정치, 경제, 문화 전반에 있어서 전성기를 구가하게 된다는 점에서, 하나의 문화적 아이콘으로 볼 수 있다. 통일을 이룬 신라는 이전 시기와 구분되는 문화발전을 이룩하고, 이를 통해서 가장 화려한 기와문화를 갖추게 되었으므로, 기와의 제작과 발전상을 통해서 당대 문화의 변화와 기와를 사용한 건물의 증가를 통해서 도시기능과 방리 내 변화를 살펴볼 수 있다. 따라서 이 논문에서는 기존의 신라왕경지역에 대한 발굴조사에서 출토된 평기와와 전 중에서 비교적 초기기와가 출토된 것으로 인정되고 있는 유적을 중심으로 출토사례와 타날방법 그리고 제와방법에 대한 비교작업을 통해서 개개 유물이 출현한 시기에 대해 고찰하였다. 또한 경주와 지방에서 출토된 평기와와 전 중에서 비교적 초기 기와가 출토된 유적을 중심으로 단판기와에 대한 비교를 통해서 경주와 지방간의 기와제작시기와 특징을 살펴보았다. 그 결과 경주지역에서 단판기와가 제작된 시기가 679년 이전으로 판단되며, 최소한 679년부터는 단판기와와 함께 중판기와가 생산되었음을 확인하였다. 또한 경주 나정유적에서 출토된 ‘의봉사년개토(儀鳳四年皆土)’ 명 명문와와 울산 입암리 유적에서 출토된 ‘정잔(井作)’ 명 명문와는 중판타날과 단판타날이 함께 사용된 기와로 679년 무렵에는 단판와 중판 두가지의 타날판이 모두 공존했다고 판단된다. 기와의 제작방법을 살펴보면 무와통(無瓦桶) 혹은 와통을 사용한 단판 기와가 초기에 제작되다가, 점차 무와통식 기와가 소멸하고 원통와통을 사용한 중판 타날기와로 변화하게 된다. 이러한 기와 제작법의 변화는 결국 와통을 이용한 기와제작법의 효율성에 기인한 것으로 판단된다. 단판 기와 역시 중판 타날판으로 제작된 기와와 비교해 볼 때, 작업능률면에서 뒤떨어지지만 매우 정성을 들여서 제작을 하였다. 이러한 작업공정은 단순히 작업능률만으로 설명하기 어려운 부분으로, 이들 단판 기와의 제작은 궁성 혹은 관청 등으로 납품되는 기와에 한정되었을 가능성을 보여준다. 따라서 단판 기와는 일정한 목적을 가지고 제작되었을 가능성이 제기된다.

주제어 : 慶州 打捺板 短板 中板 長板 印章

**An Investigation on Appearance and Significance of Silla Short
Beating Plain Roof Tiles**
- Classification and characteristics of arc-shaped beating and transverse beating -

Cha, Soon-Chul

Abstract: The short beating plate tiles with the inscription of uibongsagaeto (儀鳳四年皆土) are considered most important for the study of Silla roof tiles and have an absolute age of 679 years. This study considers the time when earlier tiles appeared by comparing cases of unearthing, beating methods and tile manufacturing methods of tiles excavated from Silla capital area in the course of excavation investigation. Comparing of relics in Gyeongju, Gyeongsan, Andong and Ulsan, where plain roof tiles were excavated, suggest that short beating plate tiles were made before AD679 in Gyeongju area, and medium beating plate tiles were made from AD679 at latest together with short beating plate tiles. Roof tiles with the inscription of uibongsagaeto (儀鳳四年皆土) excavated from Najeong ruins, Gyeongju, and roof tiles with the inscription of jeongjan (井拵) excavated from Ipamni ruins, Ulsan are roof tiles made using both methods, medium beating and short beating, and this indicates that both short beating and medium beating plates were used for the manufacture of roof tiles in AD 679. Comparing with medium beating plate tiles, short beating plate tiles are inferior to medium beating plate tiles in the aspect of production, but surpass them in the aspect of elaborateness. This difference suggests that short beating plate tiles might have been used only for roofing royal palaces or public buildings, and therefore must have been produced for special purpose different from general purposes.

Keywords: Gyeongju, beating plate, short beating plate, medium beating plate